

保育の場と連動した保育の表現技術向上について —T市保育所（園）保育士アンケート結果を基に—

Improving Expression Abilities in Pre-school Education in Relation to the Pre-School Setting
—Based on the Results of a Questionnaire Survey of Pre-school Teachers
at Day Care Nurseries and Kindergartens in City T—

福 西 朋 子
Tomoko Fukunishi
山 本 敦 子
Atsuko Yamamoto
三 宅 啓 子
Keiko Miyake

（要約）

平成22年保育士養成課程改正により、養成校は「保育との関連」において必要な「保育の表現技術」を習得させることが求められた。そこで、保育現場の表現活動と保育者の技術習得の現状を把握するために、T市の保育士を対象に「鍵盤楽器による音楽活動に関するアンケート調査」を実施した。調査結果を基にT短大の「保育の表現技術」に位置づく音楽授業の改善を目的に、養成校学生の実際と表現技術習得に向けた課題検討を行い、調査に統いて実施した保育者へのヒアリングの内容から「養成校と保育現場が連動した保育の表現技術向上」について考察し、その連動と方策も提案した。

（キーワード）

保育の表現技術 アンケート調査 養成校と保育現場の連動

I. はじめに

平成22年保育士養成課程改正により「基礎技能」から「保育の表現技術」と名称変更され、養成校では平成23年度からこの教科目で授業を行っている。この変更により「表現技術」とは子どもの表現を広く捉えて子どもの遊びや活動を促すためのものであると明確にされた、つまり、この技術は「子どもの表現」に係るものであるため「保育との関連」で習得できるようにすることが養成校に改めて求められたのである。そして、これらを受け、従来の音楽授業内容・方法を見直し、改善の機を得るよう求められたとも言えよう。しかしながら、その見直しは保育学生の現状を点検することで行えることではなく、「保育との関連」での修得を目指すためには、保育現場での表現活動と保育者の技術習得の現状をまず知ることが必要である。そこで、保育者に必要な技術として鍵盤楽器技術が依然として強く認識されている、養成校において音楽授業内容にその技術習得は必須と位置付けられている、これらのことから、T市の保育所（園）の保育士対象に「保育の場での鍵盤楽器を使った音楽活動に関するアンケート」（以下、「保育者アンケート」と記す）を実施した。

本稿では、このアンケート調査結果を基に、T短大の「保育の表現技術」に位置づく音楽授業の改善

を目的として次の3つの視点で述べる。まず、子どもの表現に係る技術を捉えるため、①保育現場での活動と保育者の鍵盤楽器による表現技術習得の実際を「保育者アンケート」実施結果から考察、②養成校の保育学生の実際と表現技術習得に向けた課題の検討、そして、保育と関連した技術習得とその向上のため、③保育現場と連動した習得方法等を保育者へのヒアリング内容も踏まえ一考する。

II. 子どもの表現に係る表現技術～「保育者アンケート」結果を基に～

「保育の表現技術」としての鍵盤楽器技術の教授のあり方を検討する上で、本章では保育現場でのアンケート調査結果から「各園での鍵盤楽器の使用状況」「保育における鍵盤楽器技術の必要度」「音楽表現技術に関して保育者養成校に望むこと」について取り上げ、保育現場における鍵盤楽器技術と保育表現技術との関連性について考察することとする。

「保育の場での鍵盤楽器（ピアノ・オルガン）を使った音楽活動に関するアンケート」
<調査方法>

保育現場での鍵盤楽器活用による活動について、保育士の技術習得に関すること、養成校での技術習得に関することを主な柱にした選択肢による質問8項目（内2項目は記述回答も併記）、記述回答による質問2項目による調査実施。

◇実施時期：2012年3月 ◇実施対象園：T市内全保育所・園

*各園に5名分のアンケート用紙を配付、回答者・数は任意として依頼した。

○回答園数 44園（公立：22園／私立：22園）

○回答保育士数 160名（公立：79名／私立：81名）

○回答保育士属性 園長：5名 主任保育士：11名 保育士：138名 無回答：6名

◆事後は報告書作成し各園に実施結果、研究結果を報告¹

1. 各園での鍵盤楽器の使用状況

「各園での鍵盤楽器の使用状況」においては次のような回答結果を得た。まず「鍵盤楽器（ピアノ・オルガン）の活用日数」については「毎日弾いている」という回答が多数であり、保育現場では日常的に鍵盤楽器がよく活用されていることがわかった。「鍵盤楽器活用の教材や活動」（図1）について最も多いのは「子どものうた」での活用であり、次いで「リズム曲」「リトミック」等の身体表現活動での活用、さらには「活動進行の合図代り」「活動のBGM」と、保育現場では鍵盤楽器が幅広い用途で活用されていることがわかる。「鍵盤楽器を活用する理由」（図2）については「園児が喜ぶから」「園児の音楽活動に必要だから」という回答が多く、歌を中心とした音楽活動において、園児の活動上また保育者の実践上必要なものとして鍵盤楽器の活用がなされていることがわかる。

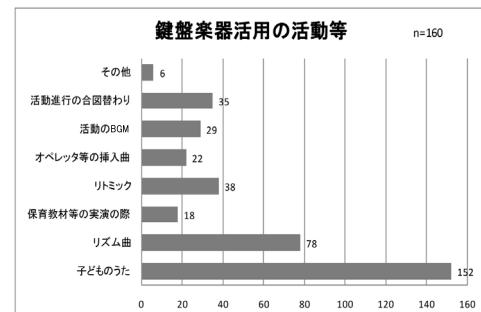


図1 鍵盤楽器活用の教材や活動

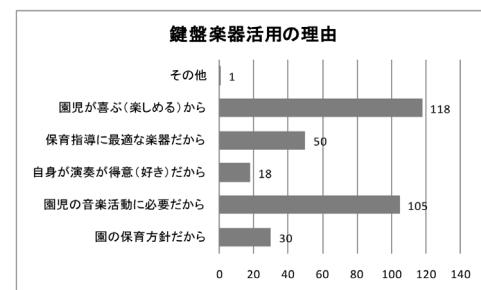


図2 鍵盤楽器を活用する理由

2. 保育における鍵盤楽器技術の必要度

「鍵盤楽器技術の必要度」に関しては次のような回答を得た。

表1 保育士にとって必要な知識・技術における鍵盤楽器演奏技術の位置づけ：理由

| |
|---|
| 1. 保育活動に音楽を活用しているから必要である。【保育者の実践上からの理由】 |
| ①歌唱活動において必要。楽器がなくても／ギターでも／CDでもよいが、ピアノがあるとより楽しんで活動を行える。 ②保育における様々な場面、行事などの活用。 ③子どもが楽しめる。身近に感じている。生活習慣になっている。 ④子どもの（歌・動き・発達・気分・状態）に合わせて使える。 ⑤保育者も共に楽しめる。子どもとの関わりができる。 |
| 2. 子どもの成長を促し、表現力を養うために必要である。【子どもの発達上からの理由】 |
| ①音を聴いて歌う。歌うことの楽しみ。（季節の歌を通して季節感）。様々な曲に触れることができる。 ②音楽に対する興味、鍵盤楽器への興味を広げることができる。 ③リズム、音感、音楽性を養うことができる。 ④様々な表現方法。自己の気持ちの表現を育む。 ⑤子どもたちの音楽表現、楽しむ姿を受け止め共感するため。 |
| 3. 保育に手軽に活用でき、身近な楽器であるから必要である。【楽器の特性からの理由】 |
| ①子どもたちにとって親しみやすく、身近な楽器であるため。 ②子どもの音楽活動・指導には鍵盤楽器が一番身近である。先生自身が弾く、共に歌うことがすばらしいと感じる。 |
| 4. 保育活動に広がりが持たせられるから必要である。【保育内容上からの理由】 |
| ①生活／遊び／リズム遊び／ゲームなどの中で活かせる。保育内容が広がる。楽しさが倍増する。 |
| 5. その他 |
| ①楽器の持ち方などある程度の知識。 ②歌を歌うときは他のものでも使用可能だと思う。 ③得意・不得意があるので他の保育士と助け合うこともできる。 ④CDの方が子どもの状況把握に適した場合がある。 ⑤鍵盤楽器のみならず、弦楽器、管楽器など様々な方法がある。 ⑥ピアノに替わる楽器を望んでいる。 |

「保育士にとって必要な知識・技術における鍵盤楽器演奏技術の位置づけ」に対し、保育において鍵盤楽器技術は「とても必要」「まあ必要」とする回答で占められた。近年保育者には保護者や家庭への支援をはじめとして多様な役割が求められてきているが、そのような状況下においてもなお、鍵盤楽器演奏技術は「保育士にとって必要な知識・技術」として位置づいていることがわかる。その理由について記述されたものを要約するとおよそ4項目に分類することができる（表1）。これは先述の「鍵盤楽器を活用する理由」とも若干重複しているが、保育者個々の記述内容を通して、保育全体における鍵盤楽器演奏技術の位置づけをより具体的に確認することができる。まず1つ目の理由は「保育活動に音楽を活用しているから」である。先述の「鍵盤楽器活用の教材や活動」で示したように、現場では歌唱活動をはじめ、リトミックや劇あそびなど音楽を用いた表現活動が年間を通して日常的に行われている。とくに歌唱活動において、鍵盤楽器による伴奏は音程やリズムが明確で子どもたちの歌を一齊に進行することができる。また、この楽器は音域の幅広さを活かし、リズム、速さ、強弱、和音などを工夫することによって多様な表現を生み出すこともできる。子どもの歌う姿や動きに応じて、また、園生活での子どもの気分、状態に合わせて鍵盤楽器を活用したりしている保育者もいることは注目すべきところであろう。

2つ目は「子どもの成長を促し、表現力を養うため」という子どもの発達上からの理由である。様々な音楽活動あるいは鍵盤楽器の生演奏が子どもたちにもたらすものとして、「音を聴いて歌う」「歌うことの楽しみ」「音楽に対する興味」などから「リズム」「音感」「音楽性」「音楽表現」に至るまで、音楽に関する項目が多様に挙げられている。また「自己の気持ちの表現を育むことができる」というように、「人としての表現の育成」という観点からその可能性を述べる保育者もあり、音楽活動あるいは鍵盤楽器による保育実践の広がりを指し示す例の一つとなっている。

他にも3「保育に手軽に活用でき、身近な楽器であるから」という楽器の特性からの理由、4「保育活

動に広がりが持たせられるから」という保育内容上からの理由が挙げられている。1~4の各項目において共通に見受けられることとして注目すべきは、音楽活動における子どもたちと保育者との相互一体的な関係性であろう。1-⑤「子どもとともに保育者も楽しむことができる。子どもと音楽を通して関わることができる。」、2-⑤「子どもたちが音楽に合わせて表現し、楽しむ姿を受け止め、一緒に共感するため。」、3-②「先生自身が弾く、共に歌うことがすばらしいと感じる。」などからも分かるように様々な音楽活動を行う過程で、子どもから子どもへ、子どもから保育者へ、そして保育者から子どもたちへ気持ちや思いを行き来させ、子どもたちと保育者が「今・ここで」しか味わえない一体感を感じ合うことは将に「音楽」という分野の大きな特殊性であろう。そのような相互一体的な関係性や体験がどのような状況において生み出されるのか、保育者の鍵盤楽器演奏は、そこでどのような役割を果たしているのかについて、今後実践事例をもとに具体的な検討を進めていく必要があるだろう。

3. 音楽表現技術に関して保育者養成校に望むこと

「保育者養成校に望むこと」に関して、まず「大学・短大で修得したかった技能」についての回答（複数回答）を（図3）の通り挙げる。この結果は、今、現場で必要がある技術であるため養成校での技術習得を望むというよりも読み取ることができる。回答内容としては、「うたのレパートリー」「弾き歌いの方法」が上位で、うたう活動に必要な技能習得を多くが望んでいることがわかる。また、「読譜力」「コード伴奏アレンジ」が次いで上位であったが、これらもうたう活動に必要な技能である。また、「リズム曲アレンジ」「即興演奏」も少なくない。

「保育者養成の大学・短大での音楽表現技術習得内容について（意見・要望）」（表2）については、記述されたものを要約するとおよそ7項目に分類することができる。まず「1. 弾き歌い」に挙げられている内容を見ると、当然のことながら保育者に最も必要な鍵盤楽器技術は「弾きながら歌うこと」であると多くの保育者が述べている。子どもたちが園生活を楽しく豊かに送れるような歌の数々を、保育者は簡易伴奏でも良いから優しい声で弾き歌うこと、そして現場では日常的に行われている子どもへの気配り目配りや興味意欲を促す言葉がけなど、普段の保育実践を意識した技術習得体制が必要であることがわかる。「2. 習得の意識」に関しては、養成校教員が養成期間一貫して学生に伝えるべき事柄が示されている。T短大では1年次に教育実習1週間と保育実習10日間が行われるが、学生はこの2種類の実習において、幼稚園と保育園の特色や幼稚園教諭と保育士の違いなどを体験的に学んでくる。実習園や担当クラス（年齢）、または実習時期などにより保育実践内容も異なるが、そこで得た個別の体験を全体的な傾向として捉えてしまうと、保育園における音楽活動の取り組みや保育士に必要な音楽表現技術の内容や度合いについても認識のずれが生じることとなる。「2. 習得の意識」に見られる現場の保育者からの声は、「乳幼児期の子どもが育つ上で音楽はとても大切であり、保育士にも鍵盤楽器を始めとする表現技術が必要であること」を切実に述べており、そのことを養成段階から学生が理解し、計画的、継続的に技術習得できるよう指導体制

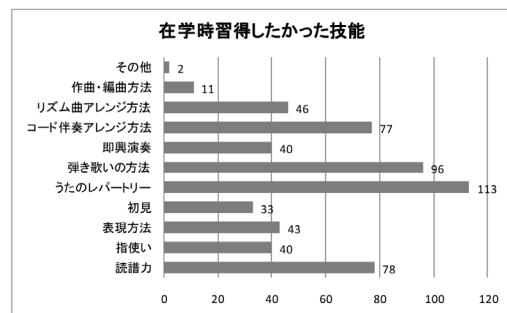


図3 在学時習得したかった技能

を組んでいく必要を示している。

近年、養成校入学生のピアノ初心者が増加している。「5. その他」②における「ピアノに関して、個々のレベルや経験に応じたレッスン、教え方、教本で授業することが必要だと思う」という意見は、こうした初心者増加の状況においてなお一層重要度を示している。現場でもピアノを得意とは言えない新任保育士が増えてきているからであろう。

多様な専門性を求められている現代の保育者養成において、「7. その他(*)」の記述には、限られた年数の中でピアノ初心者は何を目指してどのように技術習得をするべきなのかが的確に述べられている。そして、子どもの気持ちに寄り添った保育者一人ひとりのまなざしや思いを通して、保育者に必要な音楽表現技術とは、常に「音を聞いたり歌を歌ったりして音楽で表現することを楽しむ子どもたち」に向かっているということと「子どもたちと相互一体的な体験を生み出すことができる保育者のありよう」にかかっているということが強く感じられる。

表2 保育者養成で大学・短大での音楽表現技術習得内容について（意見・要望の記述を抜粋要約）

| |
|--|
| 1. 弹き歌いに関して |
| ①様々なジャンルの弾き歌いのレパートリーを持つこと。 ②コード伴奏法。肉声での歌唱。CD等の適切な利用による音楽表現活動。③「子どもを見る」「導入する」など実践に近いピアノ練習。④子どもの年齢に可能な声域やリズム曲等の選曲のしかた。 |
| 2. 習得の意識に関して |
| ①保育所就職にピアノは必須。基礎から応用までしっかりと身に付け、ピアノの大好きな学生を育ててほしい。②子どもの成長に対する音楽の大切さ、その活動にピアノは大きな役割を持っていることを理解した技術習得。③ピアノに限らず、何か楽器が弾ける方が保育士にとっては良い。 |
| 3. 音楽の基礎理解、ピアノ技術の基礎に関して |
| ①読譜力や指使い、コード、弾き歌いの方法など基本となる部分をしっかりと伝えていくことが大切だと思う。②童謡では出てこないが難しめの曲に出てくるような音楽記号を知りたい。 |
| 4. 曲の内容に関して |
| ①現場で使える曲や技術・内容を教えてほしい。子どもの歌、手遊び、行事曲、リズム曲、体操曲など。②ピアノが苦手な人に対応した内容のものがあるとよい。ある程度の知識、手あそびやリズム感は必要不可欠。 |
| 5. 初見、即興、アレンジに関して |
| ①移調、難しい曲（伴奏）の簡易化、初見の技術、即興表現や作曲の仕方などを教えてもらいたい。②発表会や劇、リトミックに使えるような曲を考える力や技術が必要。 |
| 6. リトミック、リズム曲に関して |
| ①（養成期間の授業を通して）身体を使って表現することが身についている。とても楽しくて良いと思う。②リズム遊びにも関わってくるので、リトミックという授業を少しでも取り入れてほしかった。 |
| 7. その他 |
| ①養成期間の授業に関して、大学教員と現場の保育士が交流を持つのはどうか。②ピアノに関して、個々のレベルや経験に応じたレッスン、教え方、教本で授業することが必要だと思う。③どんな楽器でも一つは身に付けていくことは大切。歌、フルート、琴、ギター、アコーディオン等。④歌い方を指導するときの説明の仕方、声の出し方、発声しやすい曲を、ピアノより教えてもらいたい。⑤手づくり楽器制作の経験、いろいろな楽器の使い方や特性、子どもたちへの指導方法の基礎など。 |
| * 「保育園では音楽教師のような完璧な技術は求めていません。未熟な人は楽譜が難しいとアレンジできず、その通りに弾こうとするので無理があり、子どもたちも戸惑います。難しい伴奏は自分でアレンジして子どもたちを見ながら歌を楽しめるように指導をお願いしたいと思います。すぐに現場で役立つと思います。」 |

III. 保育の音楽表現技術習得について

1. 保育学生の音楽表現技術習得に係る実際

養成校での鍵盤楽器技術習得においては、短い年限での習得の困難さとともに学生の技術習得意欲・意識の脆弱さも顕れ、その指導はなかなか難しい。しかし、養成校として当面の課題である「実習先で求められる弾き歌い課題への対応」や「就職試験を見据えた指導」は変わらず求められる。

(1) 1年次(入学時)の音楽技能技術に係る実際

保育学生入学時の音楽技能技術について、T短大「幼児音楽Ⅰ」受講に際しての鍵盤楽器技術レベルから概況を測る。この授業では学生の音楽技能技術レベルに応じてピアノレッスンを行っているが、そのレベル分けのための調査を行っている。内容はピ

アノレッスン経験年数と技術習得進度(レッスンテキストの進度)について問い合わせ、レッスンコースを選択するというものである。レッスンコースは4コースで、プレA(未経験~1年未満)、A(経験年数2~3年未満)、B(数年の経験)、C(継続中)としている。H25年度生までの過去3年間の各レッスンコース選択人数は表3の通りである。なお、「幼児音楽Ⅰ」は1年次必修科目である。表3からは、プレA、Aコースが毎年度、全体のほぼ6割を占めることがわかる。プレAコースには保育者志望を決めてから、あるいは入学が決まってから短大入学までにピアノを習いに行ったという学生も多く含まれる。

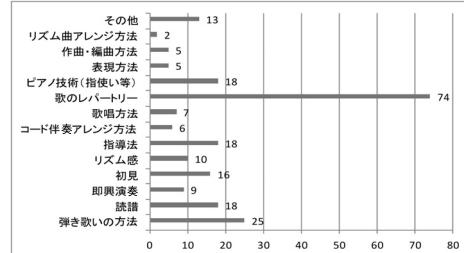
また、学生の音楽技能技術習得のための基礎知識を測るために「入学前課題確認テスト」を実施している。「入学前課題」とは入学生全員に事前に読譜に必要な知識習得やピアノ技術習得にあたっての準備を促す内容であり、確認テストとは、その読譜の知識を問うものである。3クラス中、ある1クラス(約50名)の平均点は、32点/50点満点であった。入学前課題でもあり、もっと理解を求めるところである。準備不足であるとも考えられるが、読譜に必要な知識については今までの学校教育期間中に充分習得する機会は得られていないことも窺える。以上の概況から入学時の音楽技能技術については、読譜力、ピアノ基礎技術力については、入学後に習得必要な学生が多くを占めると言える。

(2) 2年次の音楽表現技術習得について

同じくT短大2年次選択科目「子どもと音楽Ⅰ」受講生に受講にあたっての技術習得意識等を第1回授業時に質問紙形式で聴取した(回答者数:119)。1年次の技術習得の自己評価、実習での音楽活動や実践経験等について問うた。これらは、今後の習得目標を学生自身が確認するためのものもある。

表3 ピアノレッスンコース人数

| コース(人) 年 度 | プレA | A | B | C |
|---------------|-----|----|----|----|
| H23 | 60 | 34 | 43 | 16 |
| H24 | 31 | 67 | 47 | 11 |
| H25 | 46 | 66 | 34 | 14 |



質問項目「2年次(卒業まで)に習得したい、理解したいこと(記述回答・複数項目回答あり)」の回答結果が図4であるが、これらは記述回答を同種の回答に分けて表わしたものである。これら結果は、1年次の自身の習得不足、そして幼稚園、保育園の実習経験を経ての習得の必要性の認識によると窺える。最も多かった回答は「歌(手遊び含む)のレパートリー」であったが、その次に多いものとしては「弾き歌いの方法」「読譜」「ピアノ技術」であり、これらはピアノを用いて音楽活動を行うための技術である。このことから、ピアノ技術習得が学生の最も優先される課題である、実習においてもその必要性を認識していくということが窺える。また、「指導方法」について述べた回答も多かった。オペレッタ、楽器あそび・合奏、歌唱各々の「活動の指導方法」、手遊び等による「活動の導入方法」、また、「子どもに教えられるようになりたい」「子どもたちが学びやすいようにするにはどうしたらよいのか」「子どもにとつ

て音楽はどう有効的なのか」と漠然としながらも子どもの姿と保育者の役割をイメージした回答もあった。また、「保育の場に、また子どもの育ちに音楽は必要か。また、その理由を自身の考えから述べよ」の質問も設け、学生自身の音楽活動を通した保育観を窺った。まず、必要かどうかの回答は全員が「とても必要」「必要」との結果であった。記述回答の「理由」は、同種内容に分けると「コミュニケーション・一体感」「豊かな感性や表現する力を養う」「リズム感を養う」「音楽の楽しさを味わう」「その他・子どもの成長に必要等」とのキーワードで表れた。1年次の学修のほか、実習での観察、実践から学生自身が感じとったことであると考える。もちろん、これらのこととは感じとっただけに過ぎず、これから自分が様々な実践経験とその省察を丁寧に長い期間かけてねらい、目的として確立していくことである。しかし、技術習得する際に、これらが子どもの音楽活動過程で育まれる、得られるという認識を持つことは当然ながら必要なことである。

2. 音楽表現技術習得方法と内容について

では、保育学生の技術習得に係る実際を踏まえると、保育表現技術はいかに習得されるべきか。まず、この表現技術は保育者に必要な知識・技術として、いかに捉えられているか次の調査結果から一考する。

(1) 音楽表現技術の獲得時期

「保育者の専門性についての調査」(全国保育士養成協議会専門委員会)²の「保育者の専門知識・技能の獲得時期に対する意識」についての結果³を概観すると、「保育内容」に関する9項目のうち「身体、音楽、造形、言語等の表現活動に関する技術」が「実習を経て卒業までに」獲得すべきものとしての回答が最も多い(35.9%: 489/n1363)。しかし、この結果を「勤務年数1.2年までに」(27.4%: 373/n1363)の回答と比較すると10ポイント弱の差はあるものの、「勤務年数3.4年までに」(23.8%: 324/n1363)とは微小の差である。養成校在学時から継続して現場でも技術獲得が求められていることが窺える。一方、「身体、音楽、造形、言語等の表現活動の指導方法の習得」については、「実習を経て卒業までに」、「勤務年数1.2年までに」、「勤務年数3.4年までに」の回答は5ポイントずつ上昇する結果であった。これは現場での実践経験の積み重ねにより習得していくものという捉えられ方といえる。

これらの結果から、表現技術の獲得は養成校学生時での習得が最も適しているという意識が改めて確認できる。この結果は1章で述べた「保育者アンケート」の養成校への要望・意見からも充分読み取れることでもあった。しかし、この技術獲得は養成校時に習得した技術レベルを保っていればいいということでもないことが、現場に就いてからも技術獲得が求められているという結果からわかる。また、鍵盤楽器による表現技術として「保育者アンケート」から「コード伴奏やリズム曲のアレンジ方法」「表現方法」「即興演奏」が在学時習得したかった技術として「弾き歌いの方法」に次いで挙げられたが、この技術は現場で子どもの姿にかかわるなかで、その技術の必要性を認識し技術も向上していくものであろう。また、「指導方法の習得」が現場経験を経るごとに意識が高くなるという結果とも関連する。それは指導方法の向上には保育者自身の表現技術レベルの向上も伴うと考えるからである。

では、養成校それも2年間という短期間で獲得が必要、あるいは獲得可能な鍵盤楽器による表現技術は何であるのか。それに対し、どのような習得方法・内容が求められるか。

(2) 技術習得方法・内容について

1) 鍵盤楽器の基礎技術と表現技術 ー初心・初級レベル学生の指導に関してー

技術習得には、適した教材、個々のレベルにあった指導とともに受講学生の継続的な練習の積み上げが必要であることは言うまでもない。しかし、そこに練習をする目的がなければ継続した取組みとは成り得ない。ピアノのテクニック練習はどこにつながり、正確なリズム打ちは何に活かされるのかなど、目的が明確になれば自ずと練習への意欲も向上するであろう。その目的は、教員側がどのように示すのか、そして、いかに学生自身の目的として認識させるのか、その目的に至るまでの目標はどのような時期にどのような内容で標していくのか、その道筋を示すことが必要なのである。その目標として、現状では習得課題の提示と到達点について標しているが、学生は与えられた課題を何とか「こなす」という意識で取組んでいるように映り、教員側の「保育すぐに使えるレパートリー確保のために」「自身の表現力向上のために」などの目的と沿っていない。しかし、「学生の意識の問題」と片付けず、では、どのような目標を掲げればよいのか、特に鍵盤楽器の初心・初級レベル学生に対してどうあればよいのかである。鍵盤楽器の基礎技術が保育の表現技術につながっていくことを指導方法・内容において、教材設定において踏まえることが必要である。

2011年度よりコードネーム伴奏の弾き歌い曲を中心に作成した「幼児音楽テキスト」をひとつの教材本として、指導を行っている。初心・初級レベル学生の教材としても自身のレベルで伴奏をアレンジできる、正伴奏のものよりも子どものレパートリーを拡充しやすい、という点では適している。現在、基礎技術習得とも結びつけた教材として開発を進めている。

2) 実習経験と表現技術

学生は入学から1年間で学修、実習を経ると保育の活動目的や保育者の役割について考えることができるようになる。実習において、保育に音楽活動を行う「目的」を捉え、自分が保育者として活動を進める姿を描いた時に何ができなければいけないのか、つまり「指導法」を学ぶ必要性を意識する。そして、指導をするためには「表現技術」習得が必要、という筋道が立てられれば学生の意欲・意識は向上が図れるだろう。II章でも述べたが、学生の実習経験はその後の学びに大きく影響する。音楽でいえば、実習先で子どもの表現活動が豊かに行われていた、あるいは実習生として弾き歌いの実践を行った学生については、当然、自分自身の課題は明確になる、ということである。先述から、この実習経験を養成校での学修に有効につなげる、つまり、現場での連携をさらに図って保育者を養成していく必要を改めて認識をする。小川は「現場の実習の指導教員も、実習生の実践を通して、保育の知がどのように習得され、保育の実践に生かされているのか確かめる機会（保育の知の有効性を確かめる機会）であるので、養成校の教員と実習校の保育者がどう連携し、学びを蓄積しているかが問われるのである。」⁴と論じているが、その連携は未だ確立していないとも述べている。

次章では、その現場連携の課題を挙げて、これから取組みの可能性について述べる。

IV 保育現場との連携による保育者の表現技術について

1. 保育者の表現技術の習得と向上の意識の課題

先述までの結果考察等から、「保育士における鍵盤楽器技術の必要度」は、ほぼ全員の保育士が「必

要である」と意識していた。これは、鍵盤楽器を使った保育実践の音楽活動が広範囲に展開されている現状を示すものである。様々な活動を展開することは「子どもの成長を促し、自己の気持を表現する力を養うために必要である」と保育活動への広がりを意識していることも伺える。こういったことは向上意識としては大変、的を得ていることだと判断できる。しかしながら、「あるべき保育者の姿」は理解していても、実際に保育活動で実践に移すことができる保育者の実践力の実態（不足）が課題であることも浮かび上がった。したがって、「養成校時代に学んでおけばよかった」という回答になっていると考えられる。一方、保育学生に対しては、保育現場で求められる表現技術内容と具体的な学習課題の提示、そして到達点への導きが必要である。そこでの課題と問題点は卒業までに習得すべき最低保育表現技術の目標到達点の適正な位置である。しかし、これらは表現技術のレベルと質に大きく作用するため難解な課題ではある。保育現場と連動した技術習得検討のため、現場に次のようにヒアリングを実施した。

～保育現場の現状（ヒアリング内容）から～

先述のとおり「保育者アンケート」の調査結果報告書を25年4月に送付した。そこで本調査結果に対する、各園の園長・主任から忌憚のない意見・要望を聴取（ヒアリング）することにした。聴取内容は表4の通り。

| |
|--|
| ◇聴取対象：T市内の公立保育園：2園（S園・G園）／私立保育園：3園（T園・M園・Z園） |
| ◇聴取時期：平成25年10月～11月上旬 ◇聴取時間：各園1時間～2時間程度 |
| ◇質問項目： |
| 1. 保育者が子どもの音楽活動を行うに当たり不足に感じている技術 2. 技術不足を補うために行っていること 3. 養成校に求めるリカレント内容 4. 学生の技術向上のために養成校と連携できること |

<結果>**項目1**：保育現場の音楽活動内容の幅を広げて実践しようとすると、多くの表現技術が不足しているという意見が多い。多様な学生がいるので、現場に就職した学生（保育者）にもよるが、養成校で危惧し必要性を感じて教授している各音楽関係授業内容であった。このことから養成校すべての学生に浸透していない現実的意見であった。**項目2**：園内研修を主として、必要に応じて外部講師による研修会を実施している。また、先輩保育士と後輩保育士の相互に技術・知識の勉強会等を実施し、保育士の資質レベルアップを試みている。また、自己努力せざるを得ない環境を設定し、園長自らが保育士の意識向上と技術取得アップにつながる助言等も積極的に行われていた。**項目3**：日常の保育業務の煩雑さと限られた保育所経営予算の中に於いて、できるだけ研修や講習会に参加させるような努力がなされているが、多くの保育士が自信を持って音楽活動の保育実践を展開できるレベルまで達していないことが多く挙げられていた。従って、保育現場と養成校が気軽に交流できる環境づくりとお互いの現状把握に努め、子どもの発達に必要な音楽経験を提供できる保育表現技術の向上につながる「勉強会」「研修会」「講習会」「アドバイス」「現場からの要望への対応」「教員への保育実践の場の提供と相互理解」「共同研究による保育実践力の向上」等、相互の理解と実践力を深める機会の設定が課題である。**項目4**：学生の実習以外の保育実践経験の必要性が多く提案されている。また、園における行事への参加やボランティア経験が保育実践力を深めることにつながるので、その場の提供を広げたいという園の意見である。

表4 ヒアリング聴取内容（抜粋）

| |
|---|
| <項目1> |
| ・学生時代の鍵盤楽器習得内容（音楽技術）が現場で十分活用されていない。(S) |
| ・子どもの発達に適応した教材および指導技術（指導内容・手順、テンポ、表現方法「伝えたい気持ち」(S) |
| ・保育者の感性とリズム感／・選曲した「歌」で何を伝えたいか不明確、従って指導のポイントが明確でない。(G) |
| ・昔からの歌「童謡・わらべ歌」などのレパートリーが少なく、歌詞の意味も理解できていない。(G) |
| ・環境に応じ「みて・きいて・感じて」即、歌が出てこない。(G) ・日常生活で音楽との接点が少ない(G) |
| ・リトミック活動の保育実践力。(T) ・自分の思いを表現する力(M) ・何のために子どもたちに経験させるかが理解されていない。(M) ・基礎演奏力（主要3コード）・楽器あそびの方法と指導実践力。(M) 即現場で使える表現技術「EX:簡単な伴奏でも心のある演奏」(M) ・弾き歌い力「子どもの状況に即して伴奏できる力」(M) ・アレンジ・即興力「ミュージカル実施に必要」・正式伴奏による弾き歌い実践力。(Z) |
| <項目2> |
| ・園から研修に参加している。／先輩が実践で使う楽譜や技術を提供している「簡易化・変奏も含め」(S・G) |
| ・行事等の打ち合わせを密にして計画と準備に時間をかけている。(S) |
| ・園内研修に専門の講師を招いている。(G) ・園長自身がクラスに入って楽しい雰囲気づくりに気を配っている。(G) |
| ・個々の保育士の努力・意欲・意識が持てる環境に置く（クラス担任による鍵盤楽器活用の必然性）。(T) ・互いの演奏交換の場を設定「個人演奏交換」(M) ・保育士同士の演奏技術の伝授(M) ・個人レッスン努力。(M) 課題曲の設定と期限の提示。(M) ・園内研修実施「Gリーダーが中心となって実施」(Z) 園で個人レッスン指導の実施(Z) |
| <項目3> |
| ・研修：「指針説明・理論と実践」保育士資格更新講習「具体的な専門性」(S) ・「子どもの年齢経過音楽発達」(G) 「愛情保育と実践」「保育士の専門性—人を育てる保育」(G) 現場の悩みに合った研修(M) |
| ・講習会：「即実践できる教材と実践方法」「歌遊びのレパートリーの拡大」「リズムダンスの実践」(T) |
| ・情報交換および交流会：「保育現場での困難内容へのアドバイス／最新情報の伝達／現場の声を伝える」(M) |
| ・リカレント研修：「卒業生のためのフォローアップ」(Z) |
| <項目4> |
| ・ボランティア経験の場の提供 (S・G) ・園への教員による出前講座の実施 (S・M) ・学生実習の受け入れの充実(S) ・保育士の大学での講演講師(M) ・園の見学ツアー企画と受け入れ(M) ・実習の評価項目に音楽に関する経験の評価欄を設定 (Z) 実習受け入れの充実「大学希望と実現実習計画」(Z) |

2. 保育現場と養成校との連動の可能性

「保育者アンケート」や学生対象のアンケート及び、T市内の保育所（園長・主任）へのヒアリングの各結果からどのようなことが考えられるかと整理し、連動の可能性を考えると次の（1）～（5）の5項目が浮かび上がった。以下に表現技術向上のための連動内容について考察し、「子どもの音楽表現活動と保育者の保育表現技術の向上」のために連携できる可能性について提案する。

（1）研修会の実施

「研修会」の内容は各園の直面している表現技術力アップの内容を望んでいた。また、研修講師の講演内容を一方的に受け入れ、その中身を即、勤務している保育園のクラスで実践しようとする傾向があることはヒアリングからわかったことである。本来は、保育者自身が、まずその内容を受容し、担当クラスにどのように適応すれば、現在抱えている問題を解消できるかを分析して保育活動に応用しなければならない。しかし、保育現場の現況からは、なかなかその域までには到達できていない現実がある。そういったことの追加学習手段として、研修会の後に、「カンファレンス（事例検討会）」を研修会講師または、養成校教員により技術習得内容の確認と音楽活動への応用実践（指導・援助）のあり方や具体的な実践方法について、意見交換やアイデア、助言も含めて実施する必要性があるのではないかと考える。

<事例1> リズム楽器の使用法の研修から

| |
|--|
| 講師の研修内容「EX:タンバリンの持ち方・扱い方と演奏方法」の説明と課題曲の演習を実施する。 →参加者は講師の指導で正式な持ち方および扱い方に従ってリズム演奏を経験→新たな演奏方法を習得→当日の楽し |
|--|

さの経験から子どもの音楽活動へ適用意志を持つ→勤務園での課題曲および保育者が経験させたい楽曲の演奏での活かし方として、子どもに研修内容の実際を伝授しようとする。→子どもたちは演奏の仕方に気を取られ音を楽しむ・音の発見・音のおもしろさを体感することが不十分になる（保育活動でのねらいと育てたい子どもの音楽的成長は何かを考えた指導・援助とは乖離してしまうことになりかねないことへの危惧）※本来、子どもは楽器に触れ、音を楽しみ→音の多様性を『発見し』たとえば、<この音は「鈴虫だよ・コオロギだよ」などあそび、クツワムシは“ほら”こうすると聞こえるだろう>などと演奏方法を考え工夫していく姿こそ保育現場における音楽成長の道筋である。子ども自身が聴いたことのある音への再現行動こそ必要なことである。その時に援助として、正式な音の出し方・演奏技術を伝えることによってより豊かな演奏（心の表現）に発展していく。

このような実際の子どもの指導方法を巡った意見検討会の実施が、子どもの成長を促す保育実践につながると考える。つまり、保育者の表現技術の向上と質の高い指導法習得の連動性への一方策である。

（2）学生の保育現場へのボランティア保育実践

このことは、大学の単位認定の「保育実習」だけでは、学生が十分に保育現場を理解できていないという保育園の意向が反映されていることからである。園を行き来する機会が多ければ、子どもと関わる時間が増え「子ども理解」が深まり、現場との連携がスムーズに運ぶことにつながる。また、日常の保育だけではなく行事参加は子ども理解のみならず保護者の様子、保育者間の連携体制、保育者と保護者の関係等を実際に学ぶことができ、より保育者の専門性に近づくことができよう。

（3）保育者との情報交換の場の設定

「保育実習」の巡回指導の際、養成校と保育現場との問題について多少の情報交換ができるが、授業への還元や現場対応の対策までには及ばない。つまり、現場の音楽活動の活性化および学生の指導実践への適切な指導の効果を確かめるまでには至っていない。そういうことから、保育現場と養成校は定期的に情報交換する場、具体的には保育の音楽表現技術（できるような技術）の質と獲得方法について検討し、特に卒後間もない保育者に対する「表現技術へのフォローアップ」の場を園内または養成校で設けることを提案したい。現実として、学生は勿論のこと保育者の生活環境が大きく昔と異なり、保育指針や教育要領に示されている子どもに経験させたい内容を経験していない。生活環境が如何に変容しても、子どもの音楽活動で育てたい人間成長への道は変わらないのであって、今将にその連携が必要になってきていると考える。

（4）共同研究への取り組み

保育者と養成校教員がともに協働して、保育士の豊かな表現力を育て補完する必要性が生じてきている。つまり、保育者を育てる養成校の専門性と保育現場の保育実践力、双方の専門性の質が子どもの成長に大きく影響すると考えるからである。養成校の教員は専門研究者、保育現場はその実践者であるから、ともに連携して保育の質を高める義務があると認識しなければならない。このような経過をたどって、互いに目の前の課題を解決できるような関係性を構築することができてこそ、「共同研究テーマ」を基に保育の質を高めることにつながると考える。

（5）保育実習と養成校の授業の関連

養成校の音楽各授業において、養成校教員の学問的力量や指導経験、現場の知識を勘案した内容だけではなく、常に保育現場の実情、保育者の思い、保育環境をキャッチ（情報交換等）した内容により授業を行う必要性を改めて感じた。筆者らは毎年、授業改善を保育現場の現況も踏まえ行っているが、今後はさらに保育現場の具体的課題を挙げ、その現況に見合った授業実施と子どもたちに経験してほしい、

伝えたい「音楽感動体験」等を保育で実践するための多様な教育プログラム開発を行う必要があろう。

V. おわりに

保育の表現技術の「保育との関連」での修得を目指すために、保育現場の保育活動と保育士の表現技術の実態に関する保育現場への調査や学内における学生の意識調査を基に、「保育現場と連動した技術習得とその向上策」について一考した。本調査は保育者に必要な技術として鍵盤楽器が依然として強く認識されている現況から、特にピアノ演奏技術にかかわって考察した。保育現場での鍵盤楽器の活用状況、保育における鍵盤楽器の必要度、音楽表現技術に関して保育者養成校に望むこと等、保育現場における鍵盤楽器技術と保育表現技術の関連性について考察することよって、保育士に必要な音楽表現技術は常に「子どもの人間成長のための技術」であるということと、「子どもの相互一体的な体験を生みだすことができる保育者の技術」が必要であるということを再認識できた。また、学生の意識は実習経験を重ねるごとに、子どもたちが生き生きと音楽活動するためには、保育者の確かな保育表現技術が必要であると認識してきているという事実も明らかになった。また、保育園でのヒアリングでは、保育士の表現技術の不足と子どもの音楽活動への指導・援助の方法に関する意見や要望があった。それは将に子どもの成長を促す保育実践につながり、求められる保育者の表現技術内容であった。こういったことから、「保育者の専門性の一端である保育表現技術の向上」を図るために保育現場と養成校と連動するための方策を提案した。保育現場と保育者養成教育内容の乖離が言われて久しい。挙げた方策の実現に向け、常日頃から保育現場と保育者養成校の互いの歩み寄りをさらに推し進めていきたい。

【註】

- 1 三宅啓子・福西朋子・山本敦子「保育の場での鍵盤楽器（ピアノ・オルガン）を使った音楽活動に関するアンケート調査結果報告」2013.
- 2 全国保育士養成協議会専門委員会平成24年度課題研究『『保育者の専門性についての調査』 - 養成課程から現場へつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取組み -』 専門委員会課題研究報告書 2013.
- 3 前掲書 「第2章第5節 保育所、児童養護施設、乳児院に勤務する保育士と保育者養成校教員が持つ保育者の専門知識・技能の獲得時期に対する意識」
- 4 小川博久著『保育者養成論』萌文書林 p. 277.

【追記】

- 1 本研究は、平成24年度全国保育士養成協議会第51回研究大会での研究発表に追加資料を加えてまとめたものである。
- 2 倫理的配慮：本研究に関するアンケート及びヒアリング聴取は、回答者に研究趣旨説明を行い協力への同意を得た。
- 3 執筆分担：I・III—福西、II—山本、IV・V—三宅